ANNUAL REPORT

事業報告書

2018

日本自然保護協会

The Nature Conservation Society of Japan

日本自然保護協会

「日本の自然を守るために力を合わせる組織」という名を掲げ、戦後間もない1951年から、時に時代と対峙しながらも、活動を続けてきました。

この間、種の保存法を含む自然保護法制や保護林制度の構築、世界遺産条約批准など、自然を守るしくみづくりを実現してきました。

今なお失われようとしている自然があります。山から海までの健全なつながりがあってはじめて守れる自然海岸。国家事業の名の下に進められる辺野古・大浦湾の埋め立てや、リニア新幹線。気候変動対策としては必要だが、自然への配慮が不十分な再生可能エネルギー開発。日本の自然は、今まで以上に複雑な危機に直面しています。

自然のちからで、明日をひらく。

昭和、平成、令和へと時代が移ろうと、豊かで美しくかけがえのない自然が、日本に住む人々の幸せな明日をひらくと信じています。

2018年、自然を守るための“新しい力合わせ”が始まりました。

衰退した農業や林業、失われた二次的自然と絶滅危惧種。その解決のための事業を、赤谷プロジェクトを代表に、全国各地に広げています。40周年を迎えた自然観察指導員の養成に代表される自然を守る人づくりは、社会を変えるために飛躍を目指す一歩を踏み出しました。

日本自然保護協会は、会員・自然観察指導員をはじめとする様々なパートナーと共に、日本の自然保護に取り組んでまいります。

日本自然保護協会は、
2018年度も多くの皆さまからのご支援を受け、
自然保護活動を進めることができました。
皆さまの継続的なご支援に心から感謝申し上げます。

理事長あいさつ

2018年度も自然を守る事業を順調に進めることができましたことを、感謝の気持ちを込めてご報告いたします。

辺野古の埋め立て問題は、県民投票によって反対の意志が明確にされたにもかかわらず、政府は強行し続けています。私たちは地元の自然保護団体と協力して科学的な調査を行いながらその成果にもとづいて活動を続けています。

自然を保護して地域を元気にする活動では、赤谷プロジェクトにおいて地域が主体的に動き出す契機が得られたことが大きな成果になっております。これはユネスコエコパークの活動とも連動したものであり、その活動が各地で展開し始めています。

絶滅危惧種の保全では、多くの方々のご寄付に支えられて、個体数が激減している四国のツキノワグマの保護、草原の貴重種であるオオルリシジミの保全、渡りをするサシバの国境を越えた保護活動が着実な成果をあげています。

自然の守り手を拡大しようとする自然観察指導員の養成は40周年をむかえ、次年度の記念事業のキックオフイベントを開くことができました。市民科学の進展を目指すモニタリングサイト1000里地調査は、新たなサイトを加えて、自然情報の蓄積を豊かで多様なものにしつつあります。

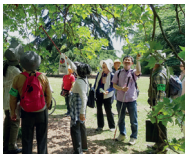
「自然のちからで、明日をひらく。」を標語として、さらなる発展を期したいと思っております。

公益財団法人 日本自然保護協会
理事長 亀山 章

日本自然保護協会 365 days

2018

4月



ネイチュア・フィーリング 自然観察

新宿御苑・みどりフェスタの恒例行事。五感を活かした、誰でも参加して楽しめる観察会です。 ▶ p.15

5月

琉球諸島 世界遺産見送り勧告

世界遺産条約諮問機関のIUCNからの見送り勧告に対し、計画改善・再申請に向けた声明を発表しました。

6月

奄美大島・嘉徳海岸の護岸縮小発表

奄美大島にある森里川海がつながり、手つかずで残る海岸線。全面護岸計画からは縮小できたものの、引き続き、保全に取り組んでいます。 ▶ p.9

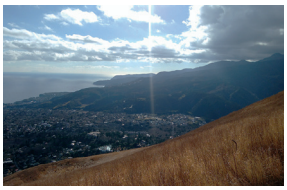
（撮影：PRESIDE）

7月

自然しらべ2018 スタート！

今年のテーマは「身近なアリしらべ！」。小さいアリの見分けも、正答率は70%超。参加者の自然を見る力にびっくり！ ▶ p.20

8月



伊豆高原メガソーラー計画に要望書提出

全国各地で、メガソーラー計画が進んでいます。個別事業への活動に加え、環境アセス制度にも意見を出しました。 ▶ p.9

9月

辺野古・大浦湾で緊急調査

護岸工事が始まった辺野古・大浦湾でのサンゴ礁調査を実施。科学的調査に基づき、環境保全措置の不備を指摘しました。 ▶ p.7

9月

小笠原南硫黄島調査がNHKで全国放送

2017年度参加した調査の様子が全国放送。原生的な自然が持つ不思議・魅力をたっぷりと紹介していただきました。

10月

サシバ俳句コンテスト 授賞式開催

宮古の小中高校生が寄せた451件の俳句から入賞作品を発表。サシバを17字で表現する瑞々しい感性が集まりました。 ▶ p.10

11月

『Insect Collection』が支援を表明

俳優・香川照之さんの昆虫と自然への想いあふれる洋服ブランドが、売り上げの一部を日本自然保護協会に寄付すると発表されました。

2019

2月

サシバ保全につながるバレンタインギフト

ラッシュジャパンと連携して、サシバ保全につながるラッピングギフトを発表。大切な人とサシバに、幸せな贈り物♡ ▶ p.19

3月

日本自然保護大賞授賞式開催

小学生と２つの高校も受賞！観察と調査に裏づけされた自然保護の発表に、参加者・関係者一同、感動しました。 ▶ p.20

11月

生物多様性条約COP14参加

エジプトで開催された国際会議に参加、イベント発表を実施。帰国後、報告会を各地で開催しました。

2020年に向けた6つの目標

日本自然保護協会は、自然保護活動を力強く推進するために
2016年から2020年までの中間目標として以下の6つを掲げ
自然保護の着実な前進と経営基盤の強化に努めています。

自然を守り生物多様性の損失を
食い止めた現場実績を増やし、
自然保護のしくみや制度づくりの
実績を増加させる。

生物多様性・自然のちからを
活かしたモデルとなる地域づくりの
実例を増加させる。

市民の自然とのふれあいの機会や
「自然のちから」の理解の場を
増加させる。

会員・支援者に支えられる自然保護
NGOとして、多角的な支援を得る。

自然保護活動の連携を強化し、
日本自然保護協会の認知度を
飛躍的に伸ばす。

他分野の支援を得て、段階的能力開発、
働きやすい職場環境を構築する。

力を入れる重点事業

緊急　なくなりそうな
自然を守る

＋

I　日本の絶滅危惧種を守る

II　自然で地域を元気にする

III　自然の守り手を増やす

緊急

なくなりそうな自然を守る

辺野古・大浦湾の保全

約 20 年前、ジュゴンの餌である海草の市民調査を企画。
沖縄島東海岸で予備調査をしたところ、種の多様さや面積など
十分な餌場といえるのは辺野古などごく一部だけでした。
その危機感から、辺野古の保護活動が本格化しました。
辺野古の浅いサンゴ礁（写真左）と大浦湾の深い海（写真右）
という独特な地形が、絶滅危惧種を含む多様な生き物を
はぐくんでいます。

なぜ

「なくなりそうな自然を守る」は、日本自然保護協会設立以来の基本的なスタンスです。辺野古・大浦湾は、日本を代表する生物多様性の重要な海域でありながら開発規模が大きく、環境アセスメントの不備など、自然保護問題として重要度が高く取り組みを続けています。

活動

独自調査とそれにもとづく科学的な政策提言が基本的な活動です。環境アセスメントは適切か、環境保全は十分に行われているかを監視し、課題を指摘しています。2018年度は、埋め立て承認撤回にあわせ緊急調査 (p.7) も行いました。

これから

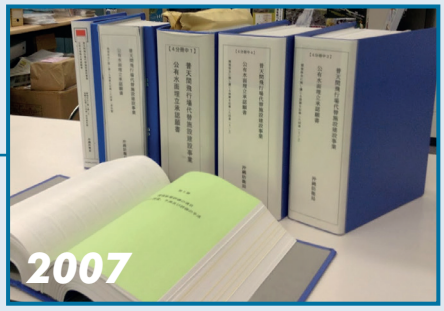
サンゴ礁の海の埋め立てを一刻も早く止めたい。その思いは変わりませんが苦戦しています。環境保全上の問題を積み残したまま工事が進んでしまわないよう、影響を広げないように事業者による環境保全の監視を続けます。また、辺野古・大浦湾には埋め立て範囲外にも多くの重要スポットがあるので、海洋保護区の設定を働きかけていきます。

浅い部分から埋め立て工事が進んでいる、辺野古の海。
（提供：沖縄ドローンプロジェクト）

これまでの活動

自然環境の調査

日本自然保護協会は、辺野古では他のNGOがほとんど行っていない海中の調査を行ってきました。2002年に海草藻場の市民参加のモニタリング調査を開始し、工事直前の2012年まで10年間継続しました。日本には海草の研究者は少なく、把握できていたのは本州周辺のアマモで、熱帯性海草は十分な調査すら行われていませんでした。そのため、オーストラリアでの手法を参考に、市民参加型調査を始めました。また、2008年には大浦湾で発見されたアオサンゴ大群集の規模を明らかにしました。



環境保全の科学的な監視

いくら必要な開発でも環境に悪影響をあたえないようにという考え方に基づいて、環境アセスメントが行われています。辺野古では2007年（事前調査は2003年）から2012年まで環境アセスメントが行われ、それを根拠に埋め立ての手続きや工事が進められています。日本自然保護協会は専門家の協力を得て、環境アセスメントの段階ごとに時には7000ページに及ぶ書類を精査し、具体的に問題点を指摘してきました。計画されていた環境保全措置が、工事の中で実際に効果を発揮しているか科学的な監視を続けています。

国内外への保全のはたらきかけ

2000年にWWFジャパンらとともに、沖縄島のジュゴン、ノグチゲラ、ヤンバルクイナの保全を提案、IUCNからの勧告として決議されました。IUCNの総会が世界自然保護会議と名称を変えた第2回目、ヨルダンでの会議でした。その後も、保全の制度、環境保全策などについて具体的に意見をまとめ、事業者、地元自治体、その他関係者に伝え、改善をはたらきかけてきました。最近の5年間だけでも意見書は50本以上になりました。写真は、2014年の外国人記者クラブでの記者会見のようすです。

2018辺野古緊急調査

6年ぶりに立入制限海域内の自然を集中調査！

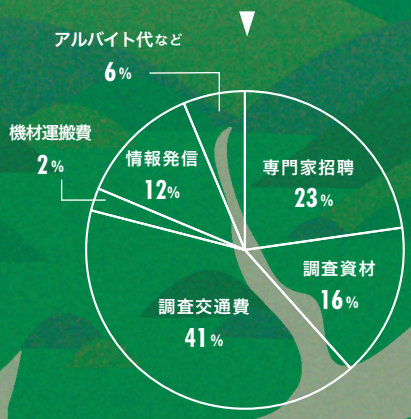
2017年にコンクリートブロックが投入され、ついに海を埋め立てる工事が始まってしまいました。埋立範囲だけでなく周辺の広い範囲も立ち入り制限区域となり、ジュゴンの餌場である海草藻場に影響が及んでいないかを懸念しつつも確認することはできなくなりました。そんな中、2018年夏に沖縄県が埋立承認を撤回し、工事が中断されました。埋立承認後に確認された軟弱地盤や環境保全措置の不適切さなどがその理由です。工事中断に伴って立ち入り制限区域を示すフロートも撤去されるとのニュースを受けて、緊急調査を計画。辺野古の海の現状確認に向かいました。

実施したのは、1 ジャングサウオッチ（海草藻場調査） 2 護岸周辺状況調査 3 サンゴ調査 4 長島洞窟調査です。

海の調査は、船のほか安全管理や機材などが必要で、陸上の調査に比べ費用がかさみます。潮汐によって活動できる時間や時期も限られ、一度に調査ができる範囲も陸上に比べてとても狭いのです。今回、短期間に集中してこれだけの調査を行えたのは、みなさまからのご支援と現地でのボランティアのご協力があったからこそ。本当にありがとうございました。

辺野古緊急調査への寄付金額

2,822,330円



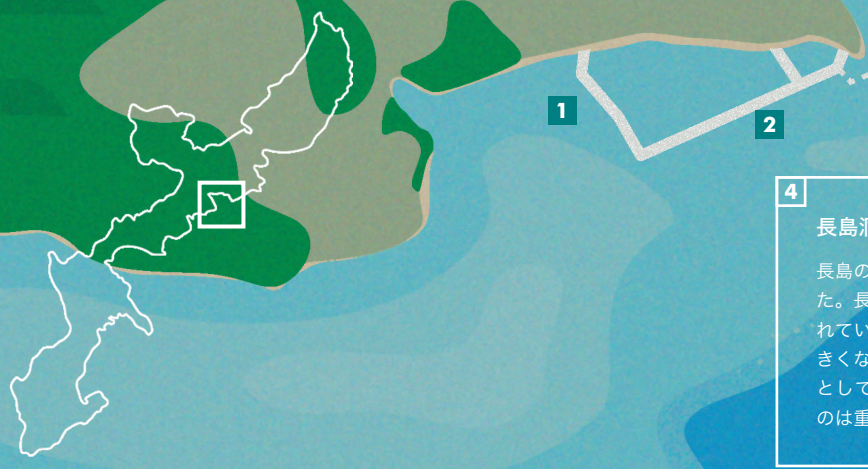
※緊急調査だったため日程等が選べず、交通費が割高になっています。

※ボランティアの皆さまのおかげで金額以上の大きな活動ができました。

1

ジャングサウオッチ（海草藻場調査） 9/9－12

6年ぶりに海草の生育状況や種類を調べたところ、2012年と比べ確認できた海草の種類が減り、護岸沿いで海底の変化もみられました。4種類の海草が確認されていた護岸西側のポイントは、ジュゴンが好んで食べるウミヒルモなど3種類の被度が減少。赤土など海水の濁りにも強いと言われるボウバアマモが占める割合が増えていました。現地を確認できたことで、より具体的に環境保全措置を提言することができるようになりました。



4

長島洞窟調査 9/8,10,10/27,29

長島の洞窟について、専門家を招聘して上陸調査ができました。長島の洞窟は、アセスの時点は情報がなく環境配慮がされていません。調査の結果、有名な洞窟に比べると規模は大きくないものの保存状態がとてもよく、海岸や島にある洞窟として多くの新しい発見のある洞窟であることが判明したのは重要な成果です。

ご協力くださる方々

東恩納 琢磨 さん

地域の自然を活かした暮らしを目指してエコツアーなどを実施しています。埋め立てではない辺野古の未来を語り合う人。地元の海にジュゴンがいると知りその姿を見つけたり、アオサンゴ大群集の発見者でもあります。

リチャード・グレハン さん

辺野古のドキュメンタリー映画『ZAN ～ジュゴンが姿をみせるとき』の監督。政治問題ではなく、自然保護問題として辺野古を伝えたい、そんな日本自然保護協会の願いを映画にしてくれました。美しい映像にのせて届けるメッセージは、海外の映画祭でも高い評価を受けました。

牧志 治 さん

ヘリ基地反対協議会ダイビングチーム・レインボーのメンバーであり、調査のとき、的確に調査ポイントに連れていってくれる船長です。2018年の緊急調査では、連日の調査に船を出していただきました。水中写真家、ダイバーであり、辺野古の海の中のようすをよく知っているので、水中の私たちも安心して調査ができます。

2 3

護岸周辺状況調査　9/8,10,10/1,2,7

サンゴ調査（コモチハナガササンゴ群集、サンゴ移植予定地）　10/9－11

護岸の周辺状況を確認し、ビデオ等で記録していきました。護岸で潮流が変わったのか、場所によってはひどく濁っていました。また、埋め立て範囲内ですが深い場所であることを理由に、移植など環境保全措置がなされない絶滅危惧のサンゴのようすを確認できました。

「政治の話なの？」

「辺野古って、政治の話じゃないの？」そういう声をお聞きすることがあります。ある面に限ればそのとおり。辺野古の基地移設計画は、安全保障の国策から計画されています。ただし、どんな国策でも環境破壊は避けるべきです。日本自然保護協会の誕生の地、尾瀬のダム計画も阿寒岳の硫黄採掘も、戦後の復興に必要とされた国策で、当時の新聞には、この緊急事態に自然が大事なんて何を言っているんだという批判記事が見られます。しかし、当時の先輩たちが開発を止めてくれて、今があります。辺野古のサンゴ礁は将来世代のために失くしてはいけない、そう確信しています。それでも、国策に対しての強い意見は、純粋な環境保全の主張であっても、反体制的、政権批判、そんな誤解を受けがちです。だからこそ、科学的な根拠と理由を示すことができる主張を大切にしています。日本自然保護協会は、環境保全を科学的に実施してもらうために活動をしています。

自然海岸

（撮影：PRESIDE）

動画やシンポジウムを通じて砂浜の価値を発信

なぜ

砂浜は単調な環境に見えがちですが、最近の研究で砂浜環境に適した様々な生き物が生息・利用していることがわかってきました。また、砂浜が高波や津波の影響を軽減させているとも言われています。しかし現在、ダムや防潮堤などで環境が変化し、多くの砂浜が減少・消失しています。

活動

2018年度には、鎌倉・愛知・奄美の３か所で、砂浜連続シンポジウムを開催しました。課題は様々ですが、砂浜生態系の重要さが十分に理解されていないことは共通していました。砂浜の価値を伝えるため、豊かな照葉樹の森からダムのない川を通じて運ばれた砂浜までがひとまとまりに残されている奄美大島の嘉徳海岸を題材に動画撮影も行いました。

これから

陸に比べて海の保全は大きく遅れています。観察会・研修会を通じて、砂浜生態系とはどんな環境なのかを知る人、砂浜を見る目を持つ人を増やすと同時に、砂浜生態系の保護地域の設置を働きかけていきます。

法制度への働きかけ

自然を守るしくみを作る

なぜ

日本の環境法制度は、諸外国に比較して非常に遅れている現状があります。その結果、いまだに自然環境が失われ続け、多くの絶滅危惧種を生み出しています。国会へはたらきかけ、法律の改正や改良を進めることで、環境に関する法律がより自然保護に役立つものになることを目指しています。

活動

「洋上再生可能エネルギーの発電施設立地促進に関する法律」では、風力発電施設の立地が風環境や経済性の観点だけで選ばれることなく、海域の生物多様性保全を基本前提とすることを附帯決議に盛り込むことができました。また「森林管理経営法」では、国民から集めた森林環境税を、林業的な視点だけでなく生物多様性保全の視点から重要な森林の管理にも使えるように附帯決議を盛り込むことができました。

これから

環境影響評価法の抜本的改正や、自然環境保全法の改正、里地里山を保全するための新たな法制度の創出など個別の法案への対応を続けていきます。NGO・NPOや一般市民の自然を守りたいという意思が開発する側への抑止力としてきちんと機能し、対等な対話ができるような法の整備を目指します。

I 日本の絶滅危惧種を守る

【サシバ】

絶滅危惧II類
活動地：神奈川県三浦半島・沖縄県宮古島・フィリピン

里山の生物多様性の豊かさを象徴するサシバの子育て

サシバは日本で子育てをして、南西諸島以南で越冬をするタカです。日本の水田と雑木林からなる里山で育まれたカエルやヘビなどを主な獲物として、子育てを行ってきました。しかし、近年の耕作放棄や生産効率を重視した一次産業の普及等によって、里山の生き物は減り、日本におけるサシバの繁殖場所は1970年代の7割以下に減少しています。世界に誇る日本のSATOYAMAが、サシバが子育てのできる、多くの生き物が育まれる場所であり続けることを目指して、保全活動を進めています。

繁殖地・中継地・越冬地が連携したサシバ保護を推進

サシバは渡り鳥です。繁殖地・中継地・越冬地が一斉に保全を進めなければ守ることはできません。日本自然保護協会は各地の自治体や保護団体と協力して、神奈川県三浦半島でサシバ繁殖環境再生プロジェクト、中継地である沖縄県宮古島市でサシバの森づくり、越冬地であるフィリピン・ルソン島でサシバ保護エコツアーを進めています。

国際サシバサミット開催を通じた国際連携と生息環境再生

サシバの繁殖地・中継地・越冬地となっている豊かな自然環境を、各地域の人々が再確認し、誇りを持ってもらう機会をつくるために、「国際サシバサミット」の開催準備を進めています。2019年には日本を代表する繁殖地 栃木県市貝町、2020年に宮古島市、2021年にフィリピン・ルソン島で開催します。各地の自治体同士がサシバ保全だけでなく、地域づくり・教育活動等で連携することによって、サシバの保全が新たな価値とともに社会に普及・推進されることを目指します。

フィリピン・サシバ保護エコツアー

フィリピン・ルソン島北部では年間5000羽に及ぶサシバの密猟が伝統的に行われてきました。それほど、身近な鳥なのです。しかし、2014年からのアジア猛禽類ネットワークと地元自治体の積極的な活動により、サシバが観光資源になることや主要産業であるココナッツ畑の害虫を多く食べていることが地元に理解され、2017年には密猟撲滅に成功しました。この状況を地域に定着させることを目的として、2019年３月からエコツアーを開催しています。田園風景の中を渡る数千羽のサシバ観察や、元密猟者のガイドによるサシバのねぐら観察、多様な野鳥観察など、自然・文化・交流を楽しむことが保護に繋がるエコツアーを継続していきます。ぜひご参加ください！

【草原のチョウ】

オオルリシジミ — 絶滅危惧IA類 / 活動地：長野県安曇野市
ウスイロヒョウモンモドキ — 絶滅危惧IA類 / 活動地：鳥取県鳥取市余戸地区

オオルリシジミ

ウスイロヒョウモンモドキ

人の関わりが欠かせない草原環境を守る

なぜ

明治時代以前、火山草原や野焼き・放牧等で維持された草原は国土の10%以上を占め、様々な動植物の生息場所になっていました。しかし、人の暮らしの変化によって草原は1%にまで減り、草原環境を主に利用してきた生き物たちは絶滅の危機にあります。日本自然保護協会は「草原のチョウ」の保全に取り組むことで、日本の生物多様性を支える草原環境の保全を進めています。

活動

長野県安曇野市で長年行われてきたオオルリシジミの保全活動と連携し、2016年から食草の移植による生息環境の改善等を進めました。その結果、2018年春にはオオルリシジミが移植場所にも分布を広げていることが確認できました。また、鳥取県鳥取市の余戸地区でウスイロヒョウモンモドキの保全と、生息地の草原環境の維持や普及啓発に取り組みました。

これから

オオルリシジミは安曇野市での安定的な個体群の定着を目指して、食草の分布域の拡大と市民参加のモニタリング講習会に力を入れます。また密猟対策や普及啓発を続けて活動を次のステップに進めます。
ウスイロヒョウモンモドキの保全活動では、引き続き生息地の草原環境の維持と改善に取り組み、安定してチョウが発生できる下地づくりを行います。

オオルリシジミモデルのプロトレックが完成しました！

日本自然保護協会は、カシオ計算機株式会社とのコラボレーションで、絶滅危惧種のチョウ「オオルリシジミ」をモデルにした、腕時計プロトレックを共同開発しました。
「イヌワシモデル」に続いて2本目となる本モデルは、おしゃれなデザインでありながら、オオルリシジミが草原を舞う5月から6月を時計の時刻と重ね、5時と6時の間にオオルリシジミが飛ぶ姿を配するなど、オオルリシジミ研究者の意匠を凝らした「究極こだわりモデル」となっています。企業の事業と連携した日本の絶滅危惧種を守る取り組みが広がりをみせています。

【四国山地のツキノワグマ】

絶滅のおそれのある地域個体群
活動地：四国

徳島県内で、センサーカメラがとらえた
ツキノワグマ

２年間の広域調査の結果、
分布域は極めて限定的でした

なぜ

日本に生息するツキノワグマは、地域で大きく状況が異なります。本州では生息域が拡大していますが、四国の個体数は多くても数十頭と考えられており、絶滅に瀕しています。島で大型哺乳類が絶滅すると自然のちからで元に戻ることは不可能です。四国はツキノワグマが生息する世界で最も小さな島。四国にクマが暮していける環境を残すため、日本自然保護協会は活動をしています。

活動

日本クマネットワーク、四国自然史科学研究センターと連携して分布調査を進めた結果、残念ながら生息分布域は極めて限られていることが明らかになりました。また、クマへの不安や懸念を取り除くため、地域の方々へのアンケート調査やヒアリング、正しい知識を普及するための地元動物園との連携などを進めています。

これから

四国のツキノワグマを守るためには、個体数を少なくとも100頭にまでしていく必要があります。そのために、生息に適したブナ・ミズナラからなる自然林の再生と、四国にツキノワグマを残したいと思う地域の方の意識醸成を並行して行っていきます。

【イヌワシ】

絶滅危惧IB類
活動地：群馬県みなかみ町・宮城県南三陸地域

宮城県南三陸地域でも
イヌワシ生息環境再生を推進

なぜ

イヌワシは日本の山地森林地帯に生息する大型猛禽類です。生息には、狩りをできる開けた草原や伐採地と、獲物となる生き物を育む多様性に富んだ森が、まとまった広い面積で必要です。日本自然保護協会は、イヌワシが暮らすことのできる豊かな森林環境の保全に取り組んでいます。

活動

日本自然保護協会は赤谷の森(p.14)において、2014年から人工林を伐採し、イヌワシの狩場を創りだす試験を行っています。また、生息地が広大なため、多様な森林管理者が連携して保全を行うことが必要です。宮城県南三陸地域では、国有林、町有林、民有林が連携し、それぞれの森林管理計画の目的にイヌワシの生息環境再生を入れることができました。

これから

狩場創出などの取り組みをさらに推進し、その効果の検証を行います。また、イヌワシの舞う森を未来へ引き継ぐために、赤谷の森と南三陸地域での取り組みをさらに推進するとともに、これらの取り組みを他の地域に普及させていきます。

II 自然で地域を元気にする

ユネスコエコパーク

綾BRセンターを訪れた小学生たち。

自然の豊かさを地域の豊かさに繋げるしくみづくり

なぜ

ユネスコエコパーク(BR)とは、ユネスコが推進する世界的なプログラムであり、自然を守り、利用し、持続可能な発展を目指す地域が登録することのできるしくみです。地域の人たちや自治体が自分たちの自然を主体的に守り、共生することのできるしくみづくりのため、日本自然保護協会はBRという枠組みを利用して、地域づくりを推進しています。

活動

2012年に宮崎県の綾BR登録、2017年群馬県のみなかみBR登録に続き、2018年10月には、支援を続けてきた甲武信BRの国内推薦が行われました。また、綾BRでは、科学的な知見に基づいた町の森林整備計画書と森林環境教育の計画書づくりに協力しました。

これから

日本には、人と自然が上手に共生してきた長い歴史があります。現在のしくみでは保護の網から抜け落ちてしまっている、生活に近い自然を守るために、里山や海辺のBR登録を推進していきます。また、自然と人が共生できる地域モデルをつくるべく、BR地域の管理運営体制の検討も進めていきます。

モニタリングサイト1000里地調査

水辺と森林のつながりの指標種・アカガエルの卵塊調査の様子

全国の市民とともに里山を調べ、保全に活かす

なぜ

里山は、近年、耕作放棄や開発による消失、外来種の侵入などにより大きく環境が変化しています。モニタリングサイト1000里地調査(以下、モニ1000)では、全国の里山で、100年間を目指して自然環境の総合的な調査を行い、里山環境の変化の早期把握と調査結果を活かした里山保全を目指しています。

活動

里地調査では、市民調査員の皆さんと植物や哺乳類、鳥類等9つの項目のモニタリングを行っています。調査結果から、ノウサギやウグイス等の身近な里山の生き物たちの全国的な減少傾向が明らかとなってきました。また調査開始から10年以上が経過し、各地では市民の皆さん主体の里山保全が広がってきています。

これから

調査から、里山環境の急激な劣化が明らかとなってきています。今後は、里山の自然を未来につなぐため、全国データを国の施策に活かしていくとともに、各地で、市民とともに新たな里山の保全活用を進めていきます。

赤谷プロジェクト

科学的な森の管理で地域を豊かにする挑戦

なぜ

群馬県みなかみ町に広がる１万haの国有林「赤谷の森」。赤谷プロジェクトは、「生物多様性の復元と持続的な地域づくり」を目指して、2003年にスタートしました。地域住民で組織された「赤谷プロジェクト地域協議会」と、「林野庁関東森林管理局」、「日本自然保護協会」が協定を結び、三者で意思決定をし、取り組みを進めています。全国のモデルとなるような「人と自然との新たな関係づくり」を目指します。

赤谷の森で増加するニホンジカ

活動

プロジェクト立ち上げから15年がたち、取り巻く社会的状況も構成メンバーも変化しました。2018年度からはそういった現状に合わせた新たな体制づくりのため、会議の種類や運営方法の見直しをしています。また、全国的に増加し環境への影響が問題になっているニホンジカを、増加する前の低密度な段階で管理する日本初の方法の模索も行っています。

地元小学校とのイヌワシ観察会

これから

2019年度は、赤谷プロジェクトの基本的な考え方や方針をまとめた「赤谷の森・基本構想」の５年に一度の改定年になります。基本構想は、国有林の地域管理経営計画等に反映されます。定期的に見直すことで、常に最適な管理計画を策定しています（順応的管理）。イヌワシの三次試験地創出や2018年度に引き続きニホンジカの低密度管理にむけた捕獲試験の実施も進めていきます。

III 自然の守り手を増やす

自然観察指導員 40周年

自然観察指導員（以下、指導員）が誕生して2018年度で40年を迎え、指導員の登録者数は3万人を超えました。全国の仲間と歩んだこの40年間、指導員の活躍は日本の自然保護に多くの成果をもたらしました。これは全国の指導員のお一人おひとりの活動があったからこそであり、日本自然保護協会にとって大きな誇りです。

1978 第1回自然観察指導員講習会を開催

1981 初めての自然観察指導員全国大会を開催

1982 研修会テキスト「フィールドガイドシリーズ」刊行開始

1985 「全国一斉ブナの森自然観察会」開催。これ以降、年1回の一斉観察会実施

1986 講習会が100回を超える。第1回ネイチュア・フィーリング研修会開催

1992 指導員登録者数が1万人を超える

指導員養成制度の誕生

1970年代、各地では開発問題が頻発していました。「開発への反対運動だけでなく、自然の価値を広く社会や次世代に伝えること、それを担える人材を育てることこそ必要だ」という想いから、金田平、柴田敏隆、青柳昌宏の3人を中心に、講習会の骨格を作りました。そしてテキスト『自然観察指導員ハンドブック』を刊行し、1978年に第1回の自然観察指導員講習会を神奈川県で開催しました。

社会に新たな「当たり前」を生み出してきた指導員活動

世界遺産の白神山地には、かつて大規模な伐採計画がありました。全国でブナ林の一斉観察会を行い、何の用途もない木とされていた「椈（ぶな）」の森林の価値を社会に知らしめたのは指導員の活動でした。また、1996年に愛知万博計画が公表された際、「子どもたちとの観察会の場所を壊さないで」と声を上げ調査を進めた指導員の活動が、身近な自然の貴重さが見直されるきっかけとなりました。今では誰もが知る「里山」という言葉は、ここから社会に広がりました。

指導員を、全国に

「自然観察からはじまる自然保護」を実践する指導員を文字通り全国・全地域に養成することを目的に、2018年度は特に講習会の開催に力を入れました。世界遺産登録による観光客の急増が危ぶまれている西表島で22年ぶりに開催したほか、香川20年ぶり、茨城16年ぶり、長崎13年ぶりの講習会を開催しました。また、九州や関西では、複数県の指導員が協力して講習会を開催しました。

「人とつながる、自然とつなげる」自然観察指導員とは

日々の自然観察を楽しみ、家族や知人と身近な自然の魅力をわかち合う。仲間と一緒に「自然観察からはじまる自然保護」に地域で取り組む。それが自然観察指導員です。一人ひとりのできることはたとえ小さくても、想いを持った人が全国各地で活動し、つながれば、自然を守り次世代に引き継ぐ大きな力になります。

1993 新たな講習会テキスト「自然観察からはじまる自然保護」発行

1995 全国規模の自然の健康診断「自然しらべ」を開始

2004 指導員登録者数が2万人を超える

2014 講習会の開催数が500回を超える

2018 指導員登録者数が3万人を超える。40周年キックオフ

数字でみる 自然観察指導員

549回
自然観察指導員養講習会の実施回数

30,201人
自然観察指導員のべ登録者数

130万人
指導員の観察会への年間参加人数（推定）

各地で注目される指導員活動の成果

指導員活動の成果は数えきれないほどあり、その価値はさらに高まっています。世界遺産・小笠原では、長年の指導員活動が柱となり地元主体の保全管理が実現し、全国でのお手本となっています。熊本県の球磨川（くまがわ）では、指導員の粘り強いはたらきかけによって国内初の本格的なダム撤去が実現し、本来の生態系が戻りつつあります。京都府や埼玉県では、指導員が中心となり県全域での絶滅危惧種・侵略的外来種の分布調査がなされ、自然の変化を見つめる大切な「目」となっています。モニタリングサイト1000里地調査の約8割の調査地に指導員が関わっており、約60箇所を国の重要里地里山に指定できました。千葉県では、小学校での指導員による自然観察会にのべ6万人もの子どもたち参加しています。そして、「自然観察会」という言葉が社会に浸透したことや、「指導員である親に影響を受けて講習会を受講した」という方が増えていることは、各地域で世代を越えて続いてきた指導員活動の最たる成果です。

40周年

キックオフイベント開催レポート

私たちがつなぐ、自然観察指導員の一歩

全国各地から指導員関係者が100名集まり、これからの自然観察会、これからの指導員の活躍についてアイディアを出し合いました。この成果を、参加できなかった全国の皆さんに届けるとともに、全国の指導員の皆さんと、これからの10年を発展させていきます。

当日のプログラム

2019年3月9日(土)
国立オリンピック記念
青少年総合センター

基調講演

「自然観察、次の一歩へ」
植原 彰(日本自然保護協会理事)

ワールドカフェ

「次の時代にみんなでチャレンジしたい
指導員活動は何だと思いますか？」

分科会(下記テーマ別)

— 1 —
自然観察会の原点をめざす
ネイチュア・フィーリング　次の10年

— 2 —
「いつでも、どこでも、だれとでも楽しめる！」
—介護・福祉の視点からユニバーサルな
自然観察を考えよう—

— 3 —
MYフィールドに自然保護問題がやってきた

— 4 —
全ての子どもに自然体験をとどけよう！

— 5 —
地域の指導員ネットワークを次世代につなぐ

— 6 —
企業と連携した観察会活動の最前線

開会挨拶

40周年、共に活動してきてくださった指導員の皆さまに対し、感謝。また、「いつでも、どこでも、だれとでも」という自然観察の原点を体現している「ネイチュア・フィーリング自然観察会」30周年の節目も一緒にお祝いです。

ワールドカフェ

指導員として自分が何をしたいか、全国のみんなと何がしたいかについてアイディア共有。「異分野・団体とつながり、自然観察を届けたい！」「ITを活用して、新しい全国一斉自然観察会をしよう！」

分科会

6つのテーマで話し合いました。介護現場に、学校教育に、企業と一緒に、自然観察を行う。日本各地で生まれた自然観察からはじまる自然保護の実践の芽を、次の10年に大きく成長させるための最初の作戦会議です。

閉会式

「観察に上手く導くことが指導員の力ではない、観察会を通じて、"参加者を笑顔にする力"こそが、僕らの誇りで、これからさらに高めるべきこと。」指導員代表として閉会挨拶をしてくださった佐野由輝さんの発言です。

指導員活動をより良いものにするために

基調講演では、市民・自然観察という発想すらなかった時代に始まった「自然観察からはじまる自然保護」の40年の歴史や観察会の原点を振り返りました。そして、持続可能な開発目標に掲げられるような社会課題に指導員として取り組むこと、観察会ノウハウの共有や研修会の開催などを発展させたいと提案しました。

それは、誰かがやるのではなく、指導員一人ひとりが担い手として行動していこう。分科会は、その思いを深める6つのテーマで話し合われました。

分科会1
ネイチュア・フィーリング

参加者のそれぞれの五感を活かすネイチュア・フィーリング。
自然観察の基本に立ち戻れる研修会をもっとやろう。

分科会2
介護・福祉の視点から

介護福祉現場など、自然観察を必要としている人がいる。
来れない人には、こちらから、自然観察デリバリー（配達）を。

分科会3
MYフィールドに自然保護問題

自然保護運動・問題って大変。
課題に直面している指導員や会員と交流する場をもっと作ろうよ。

分科会4
すべての子どもに自然体験を

子どもと自然の距離が離れている。全国各地に眠っている「子どもと自然観察のHow To」のデータベースを作ろう。

分科会5
指導員ネットワーク

例えば、Cast、Color、Connectを大切にした観察会。
指導員ネットワークには、共有すべきアイディアがまだまだある。

分科会6
企業との連携

SDGsが、企業との連携の追い風。
協働・連携のノウハウ共有が、次の一歩の鍵になる。

指導員活動のこれから

1

全国の指導員のつながりを強める

全国での自然観察会がさらに活発となるよう、各地の指導員活動の情報共有に力をいれていきます。また、全国の指導員が一緒になって取り組める観察会や調査活動の企画を充実させていきます。

2

自然観察会をさらに社会に浸透させる

30年間続けている五感を使ったネイチュア・フィーリング自然観察会や、自然保護問題が生じている場所での指導員活動をさらに広めていくための取り組みを進めます。また、子ども向けや福祉介護の現場での観察会など、自然観察会をさらに社会に浸透させるために活動の担い手を育成します。

3

中長期的な視点に立った指導員養成制度の見直し

日本全体の人口減少や様々な社会問題の深刻化、自然災害の増加など、変化する社会においてどのような指導員活動が求められるかを改めて見直すとともに、研修会や観察会ツール開発などの指導員養成制度の充実を図ります。

ノエビアグリーン財団とともに赤谷の森で実施した「未来につながる環境教室」。
ひとり親家庭を対象にしたこの取り組みでは、はちきれんばかりの子どもたちの笑顔や元気が印象的でした。

企業との連携

企業と進める自然保護活動の最前線 2018

74 件
プログラム開催数

12,514 人
プログラム参加者数

なぜ

企業は私たちの社会を構成するとても大きな存在です。そして、多くの企業が自然資源に支えられ事業活動を行っています。日本自然保護協会では、自然資源の持続的、再生的な利用を企業とともに促進し、自然保護や生物多様性の保全が企業価値の向上にもつながる社会を目指しています。

活動

2018年度は企業の事業活動と連携した取り組みがより進展しました。自然保護につながる原材料調達の推進、絶滅危惧種をモデルにした腕時計の共同開発 (p. 11) などはそのひとつです。自然とふれあい、その大切さを五感で学ぶ教育普及活動は引き続き活発でした。

これから

日本自然保護協会の活動地やネットワークを最大限に活かし、企業の皆さまと一緒になって自然保護活動を進めていきます。特に、自然保護や持続的な地域づくりにつながる調達や商品企画の推進、従業員や消費者などを対象にした教育普及活動にはさらに力を注いでいきます。

主な連携企業

株式会社 NI コンサルティング
エヌ・ティ・ティ レゾナント株式会社
カロラータ株式会社
キヤノンマーケティングジャパン株式会社
共同印刷株式会社
株式会社サニクリーン
三栄商事株式会社
資生堂グループ・資生堂花椿基金
ソニー株式会社
三井住友海上火災保険株式会社
大日本印刷株式会社
田村駒株式会社
株式会社タムラ製作所
株式会社東急リゾートサービス
トヨタ自動車株式会社
株式会社ニコン
株式会社日清製粉グループ本社
株式会社ネオナチュラル
公益財団法人ノエビアグリーン財団
ペルノ・リカール・ジャパン株式会社
株式会社マツモトキヨシホールディングス
三菱商事株式会社
三菱地所株式会社
株式会社明電舎
楽天株式会社
株式会社 LIFULL
株式会社ラッシュジャパン

ほか多数

日本自然保護大賞

多世代で活動を継続、若い力が光った受賞

自然保護と生物多様性保全に貢献した、子どもから大人までのすべての個人と団体、企業、自治体の優れた取り組みを表彰します。

88 件
2018年度応募総数

第5回となる日本自然保護大賞は、保護実践、教育普及、子ども・学生の3部門に対し88件のご応募を受け、大賞3部門のほか、沼田眞賞1件、選考委員特別賞3件を選出しました。また、一次選考で選ばれた27件が入選しました。授賞記念シンポジウムは各地から102名が参加され、各受賞者による活動発表と、シンガーソングライターで選考委員のイルカさんによる特別講演を行いました。小学6年生や高校生からシニアグループまで幅広い年代の方々が受賞活動の発表をされ、着実な保護成果や地域計画への反映、人の心を動かすまでの魅力に、来場者は皆大きな驚きと感動を受け、もっと多くの人たちに発表を聞いてほしいといった声を多くいただきました。

大賞受賞活動

[保護実践部門]

三嶺の森をまもるみんなの会

みんなで取り組む「シカ食害で痛む三嶺の森」の保護と再生

[教育普及部門]

鈴鹿・亀山地域親水団体連携体

世代の異なる3団体の連携体による水辺環境保全と次代の人づくり

[子ども・学生部門]

北海道士幌高等学校
環境専攻班・士幌環境講座

士幌の原植生、カシワ林を後世に伝えるために

特別賞受賞活動

[沼田眞賞]

特定非営利活動法人 海浜の自然環境を守る会

大阪湾最奥に残る自然海岸・甲子園浜を未来へ受け継ぐ

[選考委員特別賞]

西垣 慎治郎

ヤマセミ一家の子育て観察をとおして、県の絶滅危惧種の保全をアピール

愛知県立木曽川高等学校 総合実務部

「イタセンパラかるた」で、高校生が小学生に保護の大切さを伝える

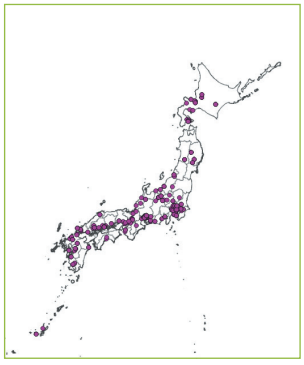
富士ゼロックス端数倶楽部

グループ社員の想いを集め、自ら行動し、自然保護を促進

―自然しらべ2018― 身近なアリしらべ！

みんなで自然の健康診断

自然しらべは、誰もが身近な場所で観察できる「生き物」や「自然環境」を全国で一斉にしらべ、地域の自然の状態を知る手がかりとなるデータを集めることで「日本の自然の健康診断」を行う、市民参加型の調査活動です。毎年テーマを変えて行っており、2018年にしらべた「アリ」では、調査期間に全国からのべ1,590人が参加し、1,231件の情報が集まりました。



身近なアリしらべ！の調査地点

アリは、私たちの家の庭や近所の公園でも5－13種ほどが見つけられる身近な生き物です。今回の調査で確認された種の上位10種までが、日本でごく普通に見られるアリでした。そのことから、現状ではアリの多様性に大きな変化が見られないことがわかりました。日本への定着が心配される侵略的外来種のヒアリ(アカヒアリ)やアカカミアリにも注目していましたが、今回の調査では発見されず、現状の水際での対策が機能していることが確認できました。

222 地点
調査地点数

サポーターの声

日本自然保護協会は、さまざまな側面から皆さまに
ご支援・ご協力いただいています。
そんな私たちの活動のパートナーである、
皆さまの声をお届けします。

Q1 活動歴はどれくらいですか？
Q2 活動におけるモットーは？
Q3 最近の取り組みについて教えてください
Q4 今後チャレンジしてみたいことは？

木村 咲稀 さま　自然観察指導員

"田んぼを見掛けるとつい覗いてしまう、そんな仲間を増やしていきたい"

A1 3年

A2 視野を広くもち、ポジティブに行動を継続する

A3 公園で開催される観察会へ自然観察指導員として参加したり、水田を主なフィールドとして活動をしています。大学院では水田に生息するカエルの研究をしており、地域での田植え体験、企業で行われる水田関係のイベントのお手伝いをしています。昨年7月は若者による水田の生物多様性を考えるイベント、「田んぼの生きもの調査フォーラム」を開催しました。

A4 農と生物多様性をテーマにしたイベントづくりをしていきたいです。農業と農地に暮らす生き物を守るために、その多様性を伝えたいという想いで活動してきました。「食」から「農」、「農」から「生物多様性」を考えることで、普段の生活と生物多様性が結びつくきっかけになればと思っています。田んぼを見掛けるとつい覗いてしまう、そんな仲間を増やしていきたいです。

御澤 栄輔 さま （株式会社ネオナチュラル）　企業連携

"子どもたちが将来の自然保護の担い手となるきっかけの場所になれば"

A1 13年

A2 明るく健康的で、自然と共存したライフスタイルの提案

A3 弊社のオーガニックコスメを使用している消費者の方々は自然環境にも関心が高く、興味をお持ちですが、それを体感する場がないと感じています。そこで日本自然保護協会さん、自然観察指導員の皆さんのご指導・協力のもと、都内で30~40代の女性をメインにした自然観察会を開催しています。こうした取り組みは「オーガニック＝自然環境へ配慮したモノづくり」という自社の理念を伝える上で大切なコンテンツとなっています。

A4 わたしたち社員自らも自然観察指導員となり、岐阜県郡上市の里山にある農場で自然と共存したオーガニックライフスタイルの提案を行っています。今後は、農場をフィールドに地方にいらっしゃる自然観察指導員の皆さんと一緒に、子どもたちを対象とした自然観察会を行っていきたいです。そして彼らが将来の自然保護の担い手となるきっかけの場所になればと考えています。

澤木 博之さま （男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会）　モニタリングサイト1000里地調査 調査員

"見どころを守りながら
地域全体の保全活動に繋げたい"

A1 15年

A2 フィールドでは、できるだけ自然に対して負荷を与えない

A3 現在、モニ1000の植物相と水環境の調査に取り組んでいます。調査方法にも慣れて調査はスムーズに進んでいます。また、自然観察会も近隣の会と連携し、毎年交流観察会も実施しています。この取り組みをベースに、他地域にもネットワークを広げ、会員間の交流と情報交換ができればと思っています。

A4 私のフィールドである秋田県男鹿半島は、風光明媚で自然豊かな大地を持ち国定公園に指定されています。地質遺産としても優れジオパークに登録されています。日本海に面した砂浜、岩場海岸に絶滅危惧種も多いので、見どころを守りながら地域全体の保全活動に繋がるように、海浜植物の分布調査にチャレンジしてみたいです。

広友 詞子さま　会員

"無理なく、参加できることから
取り組んでいきたい"

A1 4年

A2 エコバッグとエコボトルを常に携帯しています。

A3 会報『自然保護』のモニターとして、毎号感想や意見などを送っています。自分なりにも何か実践したいと考え、今年の夏はコアジサシ（絶滅危惧種の渡り鳥）の営巣調査ボランティアに参加することにしました。営巣調査は初めてなので誤って卵や雛を踏まないだろうかという不安はありますが、ベテランの方々を見習いつつ、基本的なテクニックをしっかり学びたいと思います。

A4 鳥類の保護に関心があるので、たとえばイヌワシの保護活動についてもっと学び、参加できることから取り組んでいきたいです。また、NACS-J市民カレッジ76「酒と肴と日本の風土」に参加した折、職場の同僚に内容を伝えたところ大変興味を持ってくれました。個人だけで活動するのではなく、企業内でもミニ・カレッジを開くなどの企画が実現すれば面白いかもしれません。

数字でみる

2018年度活動実績

寄付金

72,249,118円

会員・サポーター数

41,500

人 / 団体 / 法人

全国への職員・委員派遣

61件

提出した意見書・要望書

27件

開催したセミナー・講習会

81件

メディア掲載件数	1,657件
ウェブサイト訪問数	906,651
Facebookフォロワー数	8,807
Twitterフォロワー数	5,944

モニタリング1000里地調査

調べた場所

238サイト

調査員

948人

2018年までに集まったデータ

182万件

2018年までの参加者累計

101,051人

愛知目標からSDGsへ国際的な自然保護活動との連携

日本自然保護協会が事務局を務めるIUCN日本委員会では、IUCN70周年記念シンポジウム「自然を基盤としたSDGsの達成」を開催し、自然を基盤とした社会課題解決とSDGs達成を両輪とした協働の促進を提唱しました。2020年愛知目標の達成に向けた「にじゅうまるプロジェクト」では、宣言事業数が902に増えるなど、国内の活動を促進し、世界目標の生物多様性保全に貢献しています。

また、国連生物多様性の10年日本委員会（UNDB-J）の推進事務局も務め、経済界・農林水産業・教育施設など多様な組織と協力し、連携事業の認定や子ども向け図書「生物多様性の本箱」の寄贈、ユースの国際会議派遣を通じて、生物多様性の主流化を推進しました。生物多様性条約COP14では2020年以降の目標設定に向け、各国の先進的な取り組みの共有と、日本の連携活動の成果を発信しました。

2018年度決算

正味財産増減計算書　2018年4月1日 – 2019年3月31日

一般正味財産増減の部

経常増減の部

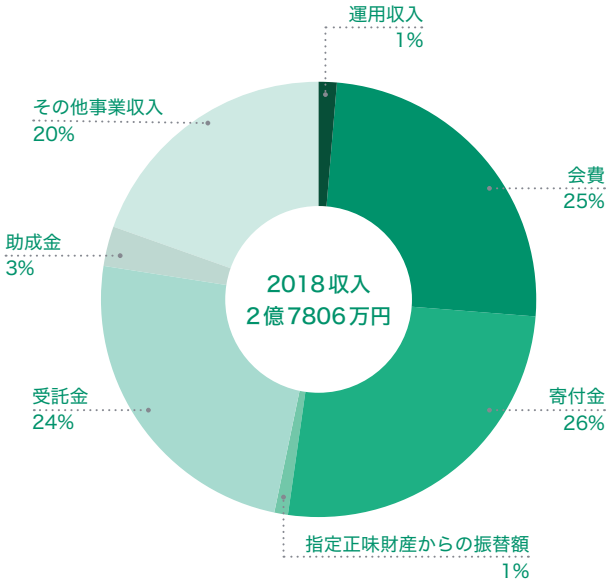
経常収益	（単位：円）
運用収入	3,862,087
会費収入	69,456,400
寄付金収入	72,249,118
指定正味財産からの振替額	3,000,000
受託金収入	66,551,400
助成金収入	7,712,635
その他事業収入（資料販売・セミナー等）	54,511,176
雑収益	720,227
経常収益計	**278,063,043**
経常費用	
事業費	271,277,095
保護事業	31,682,956
生物多様性保全事業	26,844,875
自然を活かした地域づくり事業	46,561,986
自然の守り手拡大事業	57,630,985
情報発信事業	50,853,006
その他普及啓発事業	57,703,287
管理費	17,830,225
法人運営（管理費）	17,830,225
経常費用計	**289,107,320**
当期経常増減額	**▲ 11,044,277**

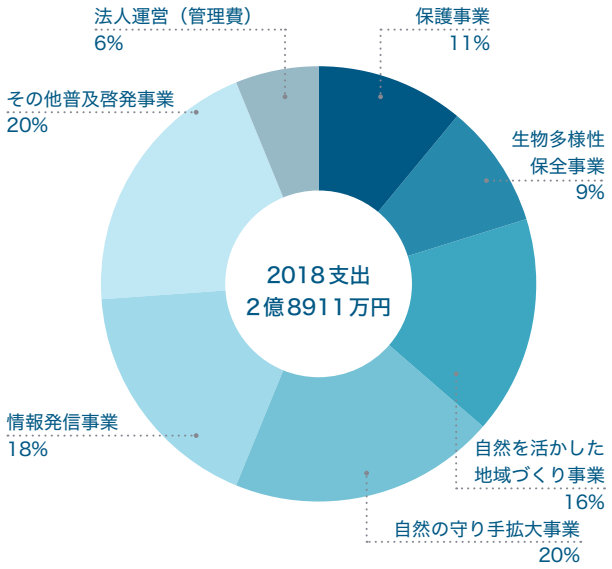
経常外増減の部

経常外収益計	3,132,502
経常外費用計	1,664,243
当期経常外増減額	**1,468,259**
当期一般正味財産増減額	**▲ 9,576,018**
一般正味財産期首残高	379,187,662
一般正味財産期末残高	**369,611,644**

指定正味財産増減の部

受取寄付金（指定）	5,000,000
一般正味財産への振替額	▲ 3,000,000
当期指定正味財産増減額	**2,000,000**
指定正味財産期首残高	601,500,000
指定正味財産期末残高	**603,500,000**
正味財産期末残高	**973,111,644**





各事業の詳細は以下の通りです。

1. **保護事業**
   突発的で緊急を要する自然保護案件の対応や法制度への提言など
2. **生物多様性保全事業**
   絶滅危惧種とその生息地の保全活動と支援キャンペーンなど
3. **自然を活かした地域づくり事業**
   モニタリングサイト1000里地調査、赤谷プロジェクト、
   ユネスコエコパーク登録支援など
4. **自然の守り手拡大事業**
   自然観察指導員の養成や次世代の自然保護の担い手育成など
5. **情報発信事業**
   広報、会報発行など

貸借対照表　2019年3月31日現在

資産の部

流動資産	（単位：円）
現金・預金	77,657,823
未収金	63,605,324
貯蔵品	2,354,964
仮払金	285,990
前払費用	922,640
流動資産合計	**144,826,741**
固定資産	
基本財産	
土地	14,640,000
定期預金等	51,603,380
投資有価証券	538,396,620
基本財産合計	**604,640,000**
特定資産	
退職給付引当資産	59,115,000
運営基盤整備積立資産	4,000,000
事業実施積立資産	9,300,000
70周年記念誌制作積立資産	7,200,000
絶滅危惧種保全事業引当資産	95,000,000
自然を活かした地域づくり事業引当資産	19,000,000
人材育成事業引当資産	21,000,000
情報収集・発信事業引当資産	55,000,000
UNDB-J支援事業引当資産	3,500,000
特定資産合計	**273,115,000**
その他固定資産	
土地	987,000
建物	1
建物付属設備	340,082
什器備品	4,068,362
電話加入権	457,252
保証金	6,400,000
投資有価証券等	30,000,000
その他固定資産合計	**42,252,697**
固定資産合計	**920,007,697**
資産合計	**1,064,834,438**

負債の部

流動負債	（単位：円）
未払金	20,574,705
前受金	2,900,000
預り金	861,089
賞与引当金	8,272,000
流動負債合計	**32,607,794**
固定負債	
退職給付引当金	59,115,000
固定負債合計	**59,115,000**
負債合計	**91,722,294**

正味財産の部

指定正味財産	
寄付金	193,500,000
指定正味財産合計	**603,500,000**
（うち基本財産への充当額）	(410,000,000)
（うち特定資産への充当額）	(193,500,000)
一般正味財産	**369,611,644**
正味財産合計	**973,111,644**
負債及び正味財産合計	**1,064,834,438**

指定正味財産のうち基本財産の充当額には、寄付金によって受け入れた資産（牧田基金、井上基金、藤原基金）を計上している。

2018年度の決算は、収入（経常収益計）が2億7,806万円、支出（経常費用計）が2億8,911万円となり、収支（当期増減額）は▲1,104万円となりました。指定正味財産からの振替額300万円をのぞいた単年度の収支は▲1,404万円となりました。

収入の部では、今年度も変わらず皆様からの会費・寄付が全体の50%以上を占めています。サシバ、イヌワシ、チョウ、四国のツキノワグマ等の絶滅危惧種を保全する支援キャンペーンや自然海岸を守る活動へのご寄付のほか、2018年度は遺贈・遺産寄付5件をお寄せいただきました。SDGsへの関心の高まりなどを受け、企業と連携して行う自然観察会やイベント、セミナー開催等の収益（その他事業収入）も大きな活動源になっています。

支出の部では、いただいたご支援を効果的に活用して各事業に取り組んでいます。「保護事業」では埋め立てが進行する辺野古・大浦湾の緊急自然調査や法制度への提言、「生物多様性保全事業」ではサシバ保全のためのフィリピンエコツアー試行などを実施しました。また3月には、自然観察指導員養成事業40周年のキックオフイベントを開催しました。

2018年度収支差額には、計画的に取り崩して活用する積立資産を充当しています。

2019年度予算

収支予算書　2019年4月1日 – 2020年3月31日

一般正味財産増減の部

経常増減の部

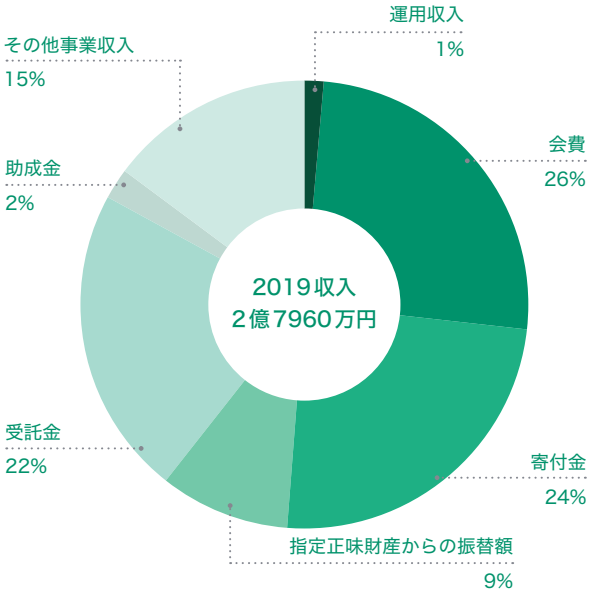
経常収益	（単位：円）
運用収入	3,700,000
会費収入	71,700,000
寄付金収入	68,195,000
指定正味財産からの振替額	25,800,000
受託金収入	62,130,000
助成金収入	6,270,000
その他事業収入（資料販売・セミナー等）	41,293,000
雑収益	500,000
経常収益計	**279,588,000**
経常費用	
事業費	268,629,000
保護事業	25,020,000
生物多様性保全事業	25,179,000
自然を活かした地域づくり事業	55,467,000
自然の守り手拡大事業	57,174,000
情報発信事業	43,844,000
その他普及啓発事業	61,945,000
管理費	18,171,000
法人運営（管理費）	18,171,000
経常費用計	**286,800,000**
当期経常増減額	**▲ 7,212,000**
経常外収益計	0
経常外費用計	0
当期経常外増減額	**0**
当期一般正味財産増減額	**▲ 7,212,000**
一般正味財産期末残高	**349,388,443**

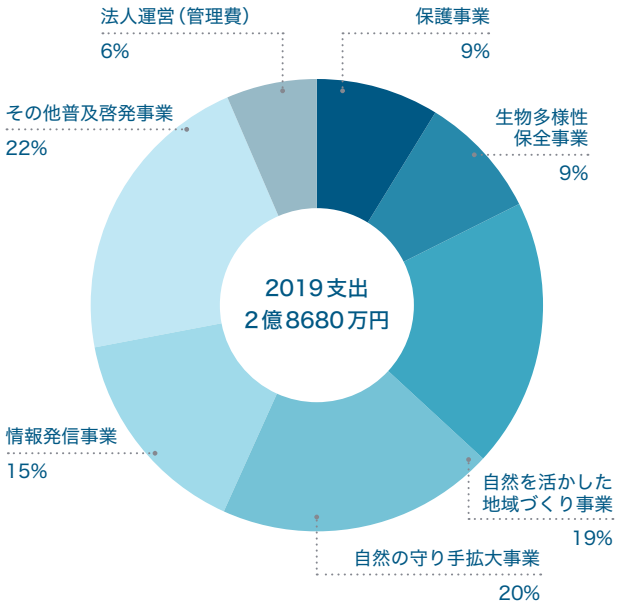
指定正味財産増減の部

受取特別寄付金	0
一般正味財産への振替額	▲ 25,800,000
当期指定正味財産増減額	**▲ 25,800,000**
指定正味財産期首残高	581,355,000
指定正味財産期末残高	**555,555,000**
正味財産期末残高	**904,943,443**

各事業の詳細は以下の通りです。

1.保護事業：突発的で緊急を要する自然保護案件の対応や法制度への提言など / **2.生物多様性保全事業**：絶滅危惧種とその生息地の保全活動と支援キャンペーンなど / **3.自然を活かした地域づくり事業**：モニタリングサイト1000里地調査、赤谷プロジェクト、ユネスコエコパーク登録支援など / **4.自然の守り手拡大事業**：自然観察指導員の養成や次世代の自然保護の担い手育成など / **5.情報発信事業**：広報、会報発行など





2019年度の収入（経常収益計）は、2億7,959万円を見込んでいます。個人会員の継続率向上や、絶滅危惧種保全事業、保護事業への支援拡大に向けた施策に注力することで達成を目指します。

支出（経常費用計）は、2億8,680万円を見込んでおり、海の保護活動や自然の守り手の拡大に注力します。業務効率化を進めながら、より効果的な保護活動を進めていきます。

2019年度収支（経常増減額）の差額▲720万円には、長期的な活動に取り組むための積立資産から同額を取り崩し、活用する予定です。

役員名簿

顧問　2017年7月3日 – 2020年6月

大澤雅彦	雲南大学 生態学・地植物学研究所 名誉教授／自然保護助成基金理事
小原秀雄	女子栄養大学 名誉教授
田畑貞寿	千葉大学 名誉教授

理事　2018年6月8日 – 2020年6月

亀山　章	東京農工大学 名誉教授　【理事長】
吉田正人	筑波大学大学院 教授　人間総合科学研究科世界遺産専攻長　【専務理事】
石原　博	三井住友信託銀行株式会社 業務部兼経営企画部CSR推進室審議役／経団連自然保護協議会企画部会長
植原　彰	乙女高原ファンクラブ 代表世話人
宇津木謙一	アミタホールディングス株式会社 上級財務責任者
神谷有二	株式会社山と溪谷社 自然図書出版部部長
篠　健司	パタゴニア日本支社 環境・社会部門ブランド・レスポンシビリティ・マネージャー
中静　透	総合地球環境学研究所 特任教授
西廣　淳	国立環境研究所 気候変動適応センター 主任研究員
藤原正寛	公益財団法人アジア福祉教育財団 理事長
保屋野初子	星槎大学共生科学部 教授／環境ジャーナリスト

監事　2016年6月8日 – 2020年6月（藤井）、2018年6月11日 – 2020年6月（鳥山）

藤井美明	PwCあらた有限責任監査法人／公認会計士
鳥山由子	全国高等学校長協会入試点訳事業部 理事長

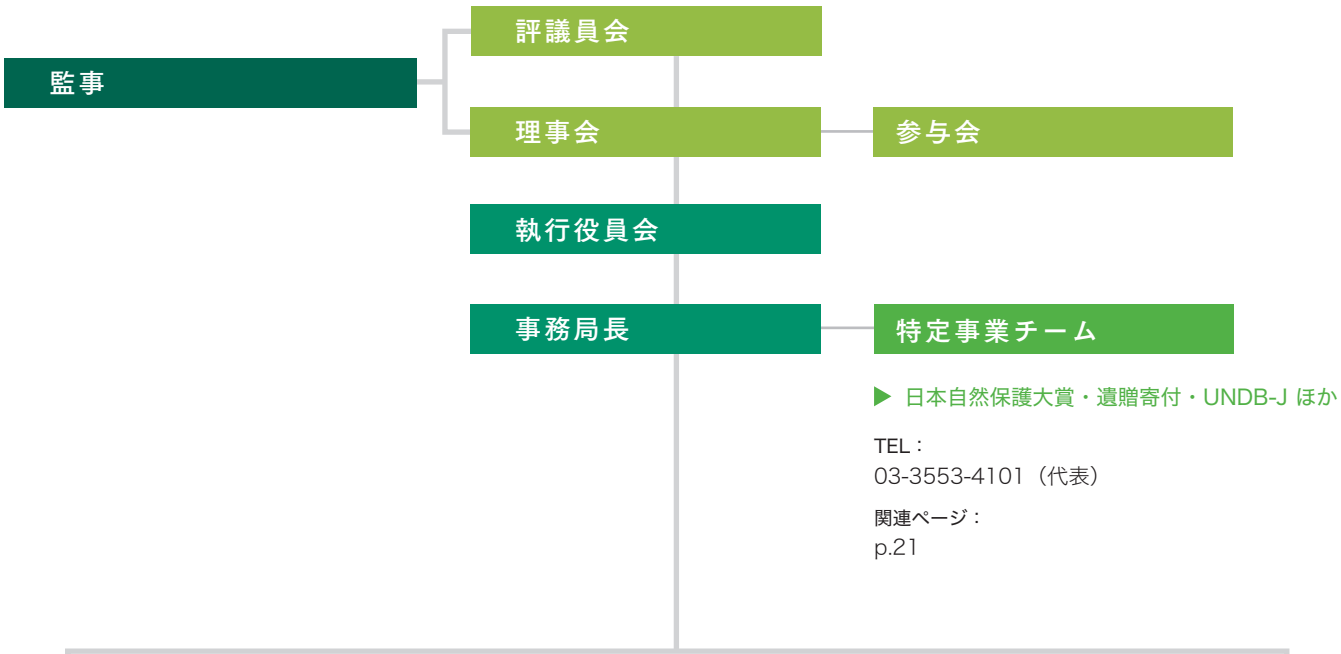
評議員　2015年6月 – 2019年6月

井田徹治	共同通信社 編集委員
梶　光一	東京農工大学農学府農学部産学官連携研究員／兵庫県森林動物研究センター 所長
川北秀人	人と組織と地球のための国際研究所 代表者
北元　均	株式会社デジタルガレージ
小泉武栄	東京学芸大学 名誉教授
小島あずさ	一般社団法人JEAN 副代表理事・事務局長
佐久間憲生	出羽三山の自然を守る会 理事長
高村典子	国立環境研究所 フェロー
谷口雅保	積水化学工業株式会社
西島　和	西島法律事務所／弁護士
西堤　徹	バードライフ・インターナショナル東京 上席アドバイザー
長谷川雅美	東邦大学理学部 教授
渡邉綱男	一般社団法人自然環境研究センター 上席研究員

参与　2018年11月 – 2020年11月

茹　清	資生堂ジャパン株式会社
足立高行	応用生態技術研究所 所長
石井　実	大阪府立大学 名誉教授
イ ル カ	IUCN国際自然保護連合親善大使／シンガーソングライター
大熊　孝	新潟市潟環境研究所 所長／新潟大学 名誉教授
川那部浩哉	京都大学 名誉教授／滋賀県立琵琶湖博物館 名誉学芸員
鬼頭秀一	星槎大学 副学長・共生科学部長
進士五十八	福井県立大学 学長
高野孝子	早稲田大学 教授／NPO法人エコプラス 代表理事
辰野　勇	株式会社モンベル 代表取締役会長兼CEO
土屋俊幸	東京農工大学大学院農学研究院 教授
中井達郎	国士舘大学文学部 非常勤講師
原慶太郎	東京情報大学 総合情報学部 教授
原　剛	早稲田環境塾 塾長／早稲田大学 名誉教授
星野智子	一般社団法人環境パートナーシップ会議 副代表理事
本間敏文	NPO法人エコシティ志木副代表理事／NACOT 会員
牧田英彦	建築設計技術家
村上哲生	中部大学応用生物学部 教授
横山隆一	日本イヌワシ研究会 副会長
鷲谷いづみ	中央大学理工学部 教授

組織図・連絡先



▶ 日本自然保護大賞・遺贈寄付・UNDB-J ほか

TEL：
03-3553-4101（代表）

関連ページ：
p.21

保護部

▶ 全国各地の自然保護問題への対応 ほか

TEL：
03-3553-4103

関連ページ：
p.5–9, p.20（自然しらべ）

自然のちから推進部

▶ 法人・企業連携活動 ほか

TEL：
03-3553-4101（代表）

関連ページ：
p.19、p.11（オオルリシジミプロトレック）

市民活動推進部

▶ 自然観察指導員養成・支援、市民科学推進　ほか

TEL：
03-3553-4104（モニタリングサイト1000 里地調査）
03-3553-4105（自然観察指導員）

関連ページ：
p.13、p.15–18

広報会員連携部

▶ 広報、WEB サイト、会報、国際 ほか

TEL：
03-3553-4106

関連ページ：
p.23–24

生物多様性保全部

▶ 絶滅危惧種保全、自然を活かした地域づくり ほか

TEL：
03-3553-4107

関連ページ：
p.10–12、p.13（ユネスコエコパーク）
p.14

総務部

▶ 支援者管理、会計、法人運営 ほか

TEL：
03-3553-4101（代表）

E-MAIL：
nature@nacsj.or.jp

関連ページ：
p.25–28

日本自然保護協会

The Nature Conservation Society of Japan

団体名称	公益財団法人　日本自然保護協会（NACS-J）
所在地	〒104-0033 中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F
連絡先	TEL 03-3553-4101（代表）/ FAX 03-3553-0139
	http://www.nacsj.or.jp/
設立	1951年10月17日
財団法人化	1960年7月19日
公益法人移行	2011年4月
スタッフ	28名　※2019年4月現在

http://www.facebook.com/NACSJ/

@NACSJ

@nacsj_official

自然のちからで、
明日をひらく。